



な準備の上部隊の半数の人員約800名の規模で乗鞍、槍の登山実施に踏み切り成功した。この成功とその後に続いた山岳踏破訓練の故をもって50聯隊は山岳部隊の名を誇り、その誇りは現在第13連隊のレンジャー教育隊に受け継がれている。昭和16年4月には満洲移駐となり、更に昭和19年4月には南方転用、テナアンにおいて玉砕した。また支那事変拡大に伴い歩兵第150聯隊が特設され中支・北支に転戦し2年後復員した。その後歩兵第50聯隊が大陸に移駐した後の兵営に歩兵第150聯隊が復活



し、大東亜戦争の昭和18年9月にはトラック島への進出の途次、殆どが海没したのである。

誇り高い松本気質は

松本市が誇っている点に高原都市の景観と自然の恵みがある。松本盆地の東側には3千メートル近い美ヶ原高原が、西側にはこれも3千メートル級の南アルプスの峯々が連なっている。また松本盆地自体600メートルの高原にあり、年間を通じて晴天に恵まれ、さらに盆地の周辺には数多くの温泉が点在している。

松本市がもっているもう一つの誇りは

国宝松本城、旧開智学校等が持つ歴史・文化の雰囲気である。松本城は姫路城、彦根城、犬山城と並んで、日本四大名城の一つに数えられており、500年前に創建されその後徳川時代初期の武將石川数正の手による改修を経て今日の姿になったと伝えられる。一方開智学校は明治6年に仮設校舎で創建された小学校であるが、多くの点で定められた教育の理想を見出すことが出来る。明治9年に竣工した本校舎の建築様式であるが、地方の都市の小学校という位置づけながら、東京の開成学校即ち後の東京帝国大学の様式を模したと伝えられている。意気実に安大と云うべき。その旧開智学校跡は昭和6年に重要文化財に指定され、河川改修に

より現在地に移設され保存の手が加えられた。旧開智学校が収集保存した各種教育資料は質・量共に日本一と云われている。

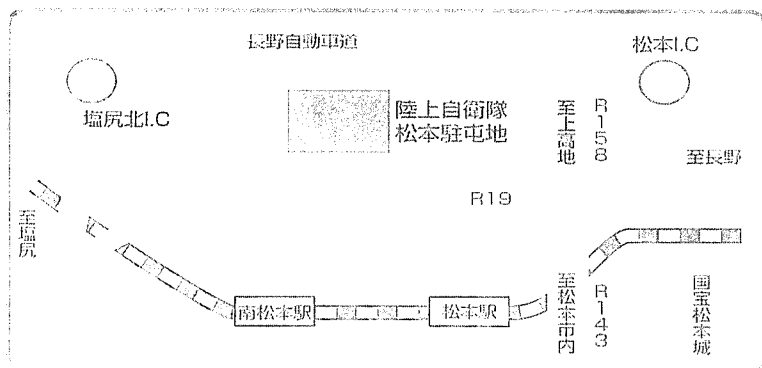
松本駐屯地

駐屯地の所在地は松本市高宮西1丁目で、JR松本駅の南南西約3kmほどの距離にある。ここは陸軍時代兵営があつた場所ではない。警察予備隊発足の2年後に県内幾つかの候補地の間で誘致合戦を繰り広げた後に県庁の判定により新しく決定された場所である。現在L字型の敷地は約33万平方メートルあり、ここに連隊本部他各部隊本部が入る庁舎、4棟の隊舎、食堂、隊員浴場、体育館、プール、グラウンド、訓練場、整備工場などが展開している。

営門の外から眺めると左手に屋上に国旗掲揚塔のある連隊本部庁舎があり、その前を走る道路には庁舎に沿って桜の木が並んで花の盛りの華麗さを思わせ、その反対側には手入れされた針葉樹の植え込みが続いている。

歩哨の前に立つと実に厳正な敬礼があり、約束時間には早すぎたが来意を告げると警備所受付へ誘導された。程なくして駐屯地広報班から迎えがきた。「広報室長は今直司司令で食事にいっておりますので・・・代理であることを詫びるニュアンスを感じ恐縮の至りであった。今まで幾つかの駐屯地

を訪ねたところでは広報室のお昼休みは多忙であるようだ。広報室への来客と部外からの電話が集中する。加えて午後からの部隊への来客は時間の余裕をもってまず広報室へ顔を出し時間を調整する事が多い。当直勤務中の広報室員は、食事のラッパが鳴ったからと云って直ぐ食堂に行けるとは限らない。人の居ない食堂で食事をしなければ



駐屯地への案内図

ばならない事情は十分に理解できる。今回もお昼前に古くからの協力者の奥様が来隊され対応していたとのことであつた。現役時代には気づくことの無かつた緑の下の忙しさを初めて知つた。

### 駐屯地の歴史

駐屯地史の概要を述べたい。警察予備隊発足直後の昭和25年、県下の長野市、上田市、諏訪市、松本市が激しい誘致合戦を繰り広げた末、松本市民の総意を背景に長野県副知事、松本市長、同市議会議長等が協議して松本市誘致が決定された。そして旧聯隊跡が既に信州大学医学部となつて居たため現在の地を駐屯地とすることとなつて次の経過を辿つて現在に至つてゐる。

昭和25年11月20日

仙台及び松島から先遣隊到着

昭和25年12月15日

松島から配名、仙台から607名が移駐して第2連隊(仮称)編成

昭和26年5月

部隊改編第2連隊(3個大隊)

昭和29年9月

第1大隊を基幹として第13普通科連隊新編

昭和37年1月師団改編

第12師団隷下へ

平成13年3月27日

第12師団は旅団に改編

第13普通科連隊

空中機動旅団として編成された第12旅団隷下の普通科部隊であり、充実されコンパクトな装備とヘリコプター機

動により県内は勿論、全国各地で発生した各種事態に対応すべき位置にあつたが、中央即応集団の発足によりその位置づけが変動するのではないだろうか。

第12後方支援隊第2整備中隊第2普通科直接支援小隊

群馬県新町に駐屯する第12後方支援隊の隷下部隊で、第13普通科連隊の武器・車両の整備を実施して支援する部隊である。

第306施設隊

茨城県古河市に本部がある第1施設

団の隷下部隊であり、長野県内の部外工事を実施した地区施設隊の系譜を継ぐ部隊である。

東部方面後方支援隊

第102施設直接支援大隊第1直接支援隊

隊

埼玉県朝霞市に本部がある東部方面後方支援隊の隷下部隊で第13普通科連隊を除く駐屯地部隊の整備支援を行う部隊である。

松本駐屯地業務隊

東部方面総監隷下部隊で松本駐屯地所在部隊及び米隊部隊に対し

て各種支援を行う部隊である。

第335会計隊

駐屯地全部隊の予算、資金、給与、調達

などの会計業務を行う。

第317基地通信中隊松本派遣隊

全国各部隊との通信を行うと共に駐屯地交換所を運営する部隊である。

第117地区警務隊松本派遣隊

警護、道路の交通統制、隊員の規律違反防止、犯罪捜査など部隊

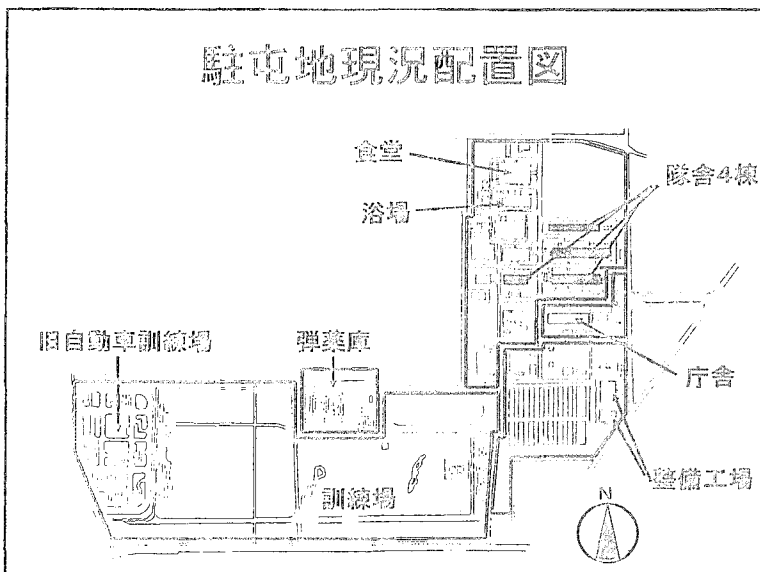
の秩序の維持を行う。

駐屯地の行事

駐屯地の主要行事を見てみたい。駐屯地が主体となるものでは創設記念式、新隊員入隊式、納涼祭(盆踊り)、追悼式、年忘れ(餅つき大会)、成人

会食。部外が主体となるものでは夏祭り(ぼんぼん祭)、各種行事での音楽支援、松本アルプス太鼓の別名を持つ

### 駐屯地現況配置図



大鼓演奏、各種競技会支援、体験入隊など訓練の合間を利用しての準備期間を考えると大変忙しいことが察せられる。

今年2月22日には防衛省移行記念祝賀会が松本市のホテルで開催された。松本市防衛協会、松本市自衛隊協力会、山岳部隊友の会、長野県隊友会が発起団体となり県知事、国会議員協力団体など約200名が参加して行われたが、支援団体が主催者となった全国的にも珍しい省移行記念祝賀行事であった。

今年度駐屯地創立57年記念行事が行された。記念日用のプログラムを開いて見ると50コマに近い協賛広告が掲載されている。また駐屯地が発行する広報紙『アルプス』の一面には式典に招待された多くの人々が赤絨毯上に並んでいる姿が掲載されているが、イラク派遣に際して隊員各人に無事帰還を祈願した善光寺のお守りを寄贈して頂いた方、或いは義捐金を頂いた方などの代表者であるという。これらを通じて云えることは駐屯地に協力頂ける方の多いこと、これを開拓した広報関係者の協力で、これを裏付ける駐屯部隊が県民と共にあることの重要性を深く認識して日頃から払っている努力の大きさに思いが及んだのである。

### イラクよりの帰還

撤収が話題になり始めた当初から如何に混乱を誘発せずに撤収するか、撤

取準備作業を進めたのか様子を知りたいと思うところである。しかしながらこのことは慎まなければなるまい。今後、もし同様な緊張状態で海外派遣が必要になった時のためにノウハウは秘匿すべきであり、これを聞き出さないのはOBとしての節度であろう。代わりにはなければならぬことがある。

派遣部隊員が希望していた事で現職故に発言できないことを忖度して声を上げることである。派遣された隊員に質問をした。それが難物であった。聞く前から「しゃべってならないことはしゃべりませんよ」そんな表情がありありと窺えた。当然である。だがこちらも定年まで勤め上げた元自衛官、思いつく位位の推察力は無くてはならない。質問を通じて得られたこと、推察を取り混ぜて述べて見たい。

### 志願した動機はなにか。

質問した相手は給水部門の小隊付きとして勤務した准尉である。答への要約は「自分の家族に自衛官としての生き方を示したかった」。視線を外すことなく熱く語ったところによれば現在定年3年前、義父は元自衛官、3人の息子のうち長男は自衛隊を退職したが2人は航空機整備曹として帯広、霞ヶ浦に勤務中との事で、海外任務の必要性を発言してきた以上自分でも一言一

致の姿を見せなければならぬと感じたという。

### 勤務間の関心事項は？

自分の事ではなく後輩隊員の心理状態の把握であったとのこと。志願して参加した隊員が多いとは云うものの、宿营地外への外出が一切禁止されていた状況は、内地で考えられないほどのストレスとなることはやむを得ない。これを和らげる方法は、家族との連絡、宿营地内での運動など限られていた。自分が元気でいることを伝えることよりも家族が元気で笑みに充ちている映像をみるのは何よりも安らぎであったが、後輩隊員が等しくこの様なストレス解消の機会を享受しているか常に目を配って居たという。

### 辛かったことは？

この質問については予想もしなかった答えが返ってきた。「小隊長から指示された賞詞の対象となる優秀隊員の名簿提出が一番辛かった」。そしてそのまま口を閉ざし筆者の目をのぞき込んだ。日が語っていた様な気がする。これは小隊長が自らの職務を放棄したわけではなく、小隊付きの意見をも尊重しようとするところの現れであろうが、尊重された旨には辛い決断がある。選ばれなかった者の落胆に心が及ぶからである。特に今回は危険を承知で厳しい環境の任務に志願した者、或いは命に従った者ばかりである。それだけ

で敬服に値する。普通の演習などとは全く違い、彼らの帰りを待つ人の目がある。賞詞を受けた者が居るのに受ける事が出来なかった自分を家族、地域の人々、部隊の仲間がどんな目で見るかを思いやると、小隊付きの心の重さが理解出来たのである。従来とは異なる形の全員を表彰する方法は考えられなかったのであろうか。海外任務の防衛記念章があることはもちろん承知であるが。

### 派遣に意義を感じたか？

要約すれば、現場レベルでは、水を供給された人々がとても感謝している姿に接し、日本の為になると十分に感じた。准尉の見る限り襲撃の危険性は感じられなかったとのことであった。

### 私服での帰国については？

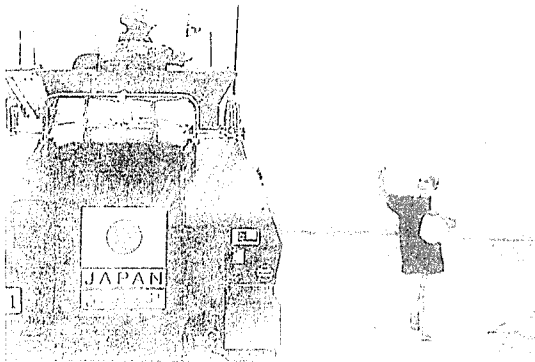
時折見せていた准尉の笑顔が瞬時凍り付いて沈黙が続き、その先を促す筆が続いた。その内にやや怒りがこもる瞳のまま呟いた。「分かるでしょ」とりつくしまもないほどであった。日本航空特別便で羽田に帰国したが、クウェートで搭乗時に私服着用を求められたと云う。日本航空のマークを見たとき感激したという多くの隊員の声を聞いた。しかしその感激は「私服に着替えるよう」と云う要請を聞き一瞬の内に凍り付き、やり場のない怒りに変

わっていったとの事である。一体私服  
 帰国とはどの機関のどのレベルの判断  
 なのだろうか。航空会社か、空港管理  
 の国土交通省なのか、或いは警察庁か、  
 官邸なのか。判断したものはその名と  
 理由を明らかにするべきであろう。筆  
 者が「下司の勤ぐりのレッテルを懼れ  
 ず」考えるのは防衛省自衛隊の地位確  
 立を好まない機関が主体となっている  
 気がしてならない。アメリカはベトナ  
 ム戦争で深い傷を負ったと云う。実質  
 的に敗戦したことばかりでは無く、帰  
 還兵達がまるで平和の破壊者であるか  
 のような報道に身を曝され、麻薬等に  
 浸るしか救いがなかった有様は決して  
 日本とは無縁とは云えまい。将来予測

される国際貢献や集団自衛権で自衛隊  
 の海外派遣を考える時、事前に制度・  
 慣習を整えて置く必要がある。繰り返  
 して主張する。私服帰国を決定した機  
 関と決定レベルと理由を明確にするこ  
 とを求めたい。

取材に当たり松本駐屯地広報室長利  
 根1尉から大変お世話になった。心か  
 らお礼申し上げると共に、駐屯部隊々  
 員のご健勝を祈念する次第である。ま  
 た靖國偕行文庫所蔵『歩兵第五十聯隊  
 史』の心の籠もる記述に感激し、その  
 描写力に引き替え、及ばぬ筆力に情け  
 なさを感じた事も述べて置きたい。一  
 読をお薦めしたい。

文責 松村興延 陸自64



イラク人道復興支援活動